

# かさおか

発行所

天理教笠岡大教会

かさおか編集掛  
笠岡市用之江377  
郵便番号714-0066  
(0865)

電話 66-1311  
FAX 66-1314



## 門司港分教会

昭和10年11月3日 設立  
平成元年5月14日 神殿落成奉告祭

本年の活動目標

## 「おぢぼがえり」

- ・「喜びいっぱいのおたすけ」を目指し、さあ、おぢぼに帰ろう。
- ・「人だすけのおぢぼがえり」を通して、ぢぼ一つに心を寄せよう。

立教185年  
12月号

教祖百四十年祭  
本部巡教開催

去る10月26日、本部秋季大祭の日に教祖140年祭へ向かう年祭活動の指針となる「諭達第四号」が發布されたことを受け、本部では、11月10日から来年2月末までの間に、全直属教会に向けて本部巡教を実施される運びとなった。

笠岡大教会では、本部長・井筒梅夫先生を迎え、11月21日午後1時より開催。大教会役員・准役員・おつとめ奉仕人・部内教会長夫妻・部内布教



静かに本部巡教の始まりを待つ参加者

所長らが参加した。

井筒先生の手に合わせて親神様・教祖・祖霊様を礼拝。

その後、大教会長様が開講のあいさつをされた。

次いで全員で「諭達」の拝読をし、井筒先生から約1時間、講話があった。

この後、大教会長様が閉講のあいさつをされた。

最後におつとめ(拍子木・井筒先生、数取・大教会長様)をつとめ、親神様・教祖・祖霊様を礼拝し、巡教の理を全よほくへ流していくことを誓い合い終講した。

(あいさつ・講話内容は次の通り)

▼大教会長様 開講挨拶

本日は、井筒梅夫先生をお迎えして、今、この場にいる皆様方とともに、本部巡教を受けられることは、本当にありがたいことだと思えます。

去る10月26日に真柱様より「諭達第四号」をご発布いただきました。そのとき、私は西礼拝場結界内の一番南側に、直属の会長として参拝していまし

た。この度の「諭達」は、統領先生が代読されるんだろうかと思っていました。おつとめを終え、真柱様がお付きの方に伴われながらゆっくりとお席に着かれて、そして、直接、この「諭達第四号」を私たちにお示しく下さいました。

その姿を拝見して、この時句に、道の芯である真柱様から、直接、この「諭達」をお聴かせいただけると、思わず、涙がこぼれました。「諭達」を、お言葉を、直接、拝聴しながら、私の胸に湧き上がってきたのは、とにかく、「諭達」に込められたをやの思いに添いきらしていただきたい。そして、お喜びいただきたい。そのことを、そのとき、強く強く感じました。

その思いを実現するためにも、今日、この日の本部巡教は、とても大切な時間です。今からお聴かせいただくお話を、しっかりと胸に納め、年祭活動へと向かう大きな勇みとしていただきたい。

そして、自分の身近な方たちにとって、今日得た気付き・勇み・喜びをお伝えいただけますようお願い申し上げます。

▼本部巡教講話

去る10月26日、ご本部の秋季大祭において、真柱様より直々に「諭達第四号」をご発布いただきました。

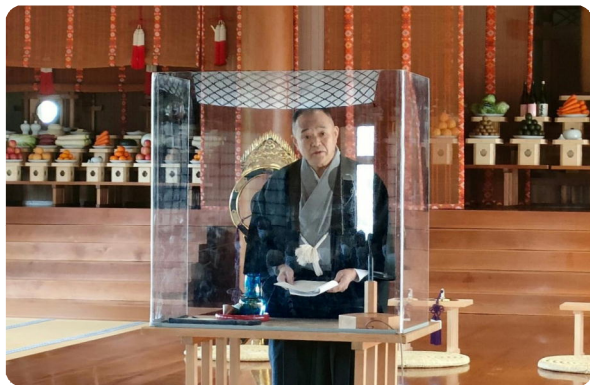
「諭達」の冒頭に、立教百八十九年、教祖百四十年祭を迎えるにあたり、思うところを述べて、全教の心を一つにしたとあります。

全教よ、ぼく・信者が「諭達」の精神に心を一つに結んで教祖140年祭を目指す年祭活動が、いよいよ始動します。そこで、この本部巡教で、まず教会の主立つ方々に、「諭達」に込められている精神と年祭活動の意義をお伝えし、全教一手一つの成人の歩みを進められるように、皆さんとともに、「諭達第四号」の精神をまず心に納め、これから教祖の年祭に向かう私たちの歩みについて考えていきたい。

▼教祖年祭の意義

「教祖年祭を勤める意義」は、「諭達」に、教祖の親心にお応えすべく、よほく一人ひとりが教祖の道具衆としての自覚を高め、仕切って成





例話を交えながら  
分かりやすくお取次ぎくださる井筒先生

人の歩みを進めることが、教祖年祭を勤める意義である。

とはつきり示される通り、「教祖の親心にお応えする」ということです。

そこで、まずは、「諭達」に、子供の成人を急ぎ込まれ、定命を縮めて現身をかくされた」と記される年祭の元一日に籠る「教祖の親心」を少し考えてみたい。

▼教祖年祭の元一日

教祖は世界たすけの元立てとしてよろづだすけのご守護をくださるおつとめを教えられました。このおつとめをしなければ、他でどれだけ頑張っても、

陽気ぐらひは実現しない。おつとめこそ、天理教の生命線ですから、教祖は終始おつとめを急ぎ込まれる。

しかし、おつとめをすれば、官憲がご高齢の教祖を警察や監獄へ連行する。初代真柱様や先人の方々は、教祖のお体を案じて、おつとめに掛かれなかつた。しかし、教祖はその中でも厳しくおつとめを実行急ぎ込まれます。

そして明治20年(陰暦)正月26日、いよいよ教祖のご身上が迫った。初代真柱様の固い決心の元、一同腹を括つて白昼堂々とおつとめを勤めたところ、奇跡的に一人の警官も来なかつたが、十二下りの終わる頃に、教祖は現身を隠された。これが、教祖の年祭の元一日です。

先人方は、教祖の仰せに従つておつとめを勤めた。なのに教祖はお姿を隠された。何故でしょう。

正月26日のおつとめは勤めることができた。しかし、もし教祖が、そのままおられたらどうでしょう。多分、人々は、その先も教祖の御身を案じておつとめをすることを躊躇するはず。姿ある限り、十分におつとめはできないだろう。そこで、25年定命を縮めてお姿を隠された。

すなわち、子供たちが安心しておつとめが勤められるように、親心のうえからお姿をお隠し遊ばされたのです。

また、人間思案を捨てておつとめを勤めることができたのだから、これからは皆一人立ちして、神一条の道を通つてくれと、その成人を促される親心からでもあります。

こうした親心から、教祖は定命を25年縮めてまで、現身をお隠し遊ばされたわけです。——親というものは、子供の身上が危なければ「私の命を何年削つてくださつて結構です。その代わり、この子の命をおたすけください」と、親神様にすがるぐらいのことはするものです。これは子を思う親心ですが、残り寿命の全てを引き換えてまでとはなかなかいかないものです。ましてやよぶべく・信者、つまり理の子の成人を促すために、我が身を引き取つてもらうような心定めなどできるものではないでしょう。これを思えば、教祖の後に続く人々が、安心して神様の道を通れる、歩めるようにと、定命を25年お縮めくださった教祖の親心は、私には、究極の親心であると思えてなりません。

▼存命の理

それまで、お道の前面にお立ちくださった教祖は、お姿を隠されてからは、陰に回り、目には見えない「存命の理」として、世界たすけの先頭にお立ちくださることになりました。

そして、「存命の理」の世界は今も続いており、これから先も悠久に続いていきます。

教祖が現身を隠された元一日は、ひながたの道が完結した日であり、それはまた、「存命の理」として新たなたすけの世界へ扉を開かれた元一日でもあります。

教祖が、ひながたの道中、幾重艱難苦勞の道を歩んでくださったのは、可愛い子供たちをたすけたい、陽気ぐらひへ導いてやりたいという親心に他なりません。

教祖のひながたの50年には、この親心が一貫して流れています。そして、ひながたの道は、定命を縮めてまで子供を成人をお促しくくださった親心で締め括られています。

さらには、この親心は、存命の教祖の親心として、今も、これから先も、私たちを守り続けてくださるのです。

この「教祖の親心にお応えす」るために、「よふぼく一人ひとり」が教祖の道具衆としての自覚を高め、全教が同じ旬に、「手一つ」になって「仕切」って成人の歩みを進める」ことが、教祖年祭への歩みであり、「教祖年祭を勤める意義」です。

▼三年千日の所以

さて、年祭活動は「三年千日」と仕切って勤めますが、「三年千日と仕切る」意味については、「論達」に引用された、

ひながたの道を通らねばひながた要らん。(略)ひながたの道より道が無いで。

(明治二十二年十一月七日)

この「略」の部分には、  
五十年の間の道を、まあ五十年三  
十年も通れと言えはいこまい。二  
十年も十年も通れと言うのやな  
い。まあ十年の中の三つや。三日  
の間の道を通ればよいのや。僅か  
千日の道を通れと言うのや。千日  
の道が難しのや。ひながたの道よ  
り道が無いで。

(明治二十二年十一月七日)

と、つまり、「教祖のひながたの道を三年と仕切ってしつかりと通ってくれ」ということです。

「年祭活動」という文字を見れば、「活動」何か実動すること目が行きま  
す。もちろん「手一つ」になって活発に  
勇んだ活動をすることは、「年祭活動」  
には欠かせないことですが、その「活  
動」の根底にあるもの、ベースとなる  
のは、「ひながたの実践」です。  
10年の中の僅か3年、ひながたを目  
標に、教祖から教えられた教えを実  
践することです。

▼この旬に通るべきひながたとは

では、この旬に、私たちが通るべき  
ひながたはどんな通り方でしょうか。  
それも「論達」に、

教祖はひながたの道を、まず貧  
に落ちきるところから始められ、  
どのような困難な道中も、親神  
様のお心のままに、心明るくお通  
り下された。

あるときは、

「水を飲めば水の味がする」  
と、どんな中でも親神様の大きな  
ご守護に感謝して通ることを教  
えられ、また、あるときは、

「ふしから芽が出る」  
と、成つてくる姿はすべて人々を  
成人へとお導き下さる親神様のお  
計らいであると諭され、周囲の人  
々を励まされた。

さらには、

「人救けたら我が身救かる」  
と、ひたすらたすけ一条に歩む中  
に、いつしか心は澄み、明るく陽  
気に救われていくとお教え下され  
た。ちばを慕い親神様の思召に  
添いきる中に、必ず成程という日  
をお見せ頂ける。この五十年にわ  
たるひながたこそ、陽気ぐらしへ  
と進むただ一条の道である。

と、この旬に通るべきひながたの道の  
大要が述べられています。

ここに、「水を飲めば水の味がする」。  
「ふしから芽が出る」。「人救けたら我が  
身救かる」という3つのお言葉が出て  
きますが、これらについて思うところ  
をお話しします。

▽「水を飲めば水の味がする」

私たちは、親神様の尽きることなく  
絶えることのないご守護にお守りいた  
だいて日々通り、教祖の親心にお導き

いただいて陽気ぐらしへの道を歩んで  
います。この「親神様のご守護があり  
がたい」。「教祖の親心もつたない」  
と、「ご守護」を「ご守護」と感じ、「親  
心」を「親心」と感じて、感謝をする  
ところから信仰は始まると思えます。

そして、この「ご守護」と「親心」  
を「ご恩」と感じるようになって、信  
仰は深まっていくのです。

この「ご守護」と「親心」に、日々  
感謝をすることが、信仰の基本である  
ように思います。

私(63歳)は40歳のときに、厄介な身  
上お手入れをいただきました。強烈な  
目眩が高じてとうとう歩けなくなり、  
立つことすらできなくなって、寝たき  
りの状態になりました。布団の中で尿  
瓶で用を足し、後は家内が捨てに行っ  
てくれますが、これが便利とは言って  
おられません。まだ40歳、現職の教会  
長、家族もいる、子供は小さい、この  
ままの状態がいつまで続くのだろうか  
と、実に不安な日を過ごしました。

ところがある日の朝、トイレに行き  
たくなくて目が覚め、ぼーっとしてい  
たせいか、電気を点けようと思って立  
ち上がったのです。そのとき「立て

た！」と思えましたね。何日かぶりに立つことができた。これは感激です、もう感動でした。そして次の日、一歩、そのまた次の日、一歩二歩と歩けるようになった。毎日が感動の連続でした。「普通に立てること、普通に歩けること、これがどれほどありがたかったのか」ということを、身上になって気付いた。まさに「水を飲めば水の味がする」というお言葉を、身に染みて実感した瞬間でした。

この身上は、良くなったり悪くなったりを繰り返して、全快まで7年掛かりました。この間、最初のうちは、「たすけてほしい」・「なんとかが守護いただきたい」ばかりを親神様をお願いしていました。しかし、あるとき、ふと「なぜ守護をいただきたいのか」・「ご守護をいただいて何をやりたいのか」と考えました。私はよふぼく、現職の教会長です。「そうだ、会長として御用を勤めること、よふぼくとして御用を勤めるために、ご守護をいただくんじゃないか」と分かったとき、もう「直してください」・「ご守護ください」というお願いは一切しなくなり、「教会長として御用を勤めさせていただきたい」・「よふぼくとしてお使い頂きたい」

い、こればかりをお願いして、そして調子が良くなれば、とにかく動いて、自分のできることをしてきたように思います。そうして、自分の身上と立場の御用に向き合いながら、そのときどきに何ができるかを考えながら勤めているうちにスツキリと身上のご守護をいただきました。

この身上になって気付いたこと・悟れたことがたくさんあった中で、かしまの・かりもの・ご守護を身に染みて分かったことがありがたかった。——もちろんそれまでも、かしまの・かりもの・教理は、教祖の教えですから、得心して人には説いてきましたが、実感が伴っていなかったなど。しかし、身上をいただいて、ご守護のありがたさを実感を持って取り次げるようになりました。親神様は7年掛けて、私にかしまの・かりもの・ご守護のありがたさを仕込んでくださったと、後になつて悟ることができました。

また、この身上のおかげで、病気で苦しんでいる人の気持ち分かるようになり、おたすけに掛かるときの、私の大きな力になっています。誰も、身上になれば辛く苦しいものです。自分だけでなく、大切な人が病気で苦し

んでいる姿は見ているだけでも辛いです。

「病氣」とはどんな姿かと考えると、「それまで当たり前のように使っていた部位や、機能するのが当たり前と想っていた臓器が、当たり前でなくなった姿」です。

逆に言えば、「病氣が治る」ということは、「当たり前でなくなったところが当たり前に戻っただけの姿」です。病氣が治れば、誰でも喜びます。身上が難しければ難しいほど、ご守護をいただいたときは、天にも昇るように喜びます。病氣が治ってうれい、ご守護をいただいてありがたいと思えます。

これは何を喜んでいいのかといえ、これは「当たり前である」ということ、これを喜んでるのです。「当たり前である」こと、「普通である」こと、「恙なき日々」、これが親神様から頂戴している「最もうれしくありがたいご守護」です。これを喜ばずして何を喜ぶのか、これに感謝せずして何に感謝をするのでしょうか。

また、たとえ身上があつたとしても、よくよく思案すれば、そこ以外では、山ほどのご守護をいただいていることに気付きます。——身上があるところはしんどいけれど、そこ以外は使える。——これもご守護です。

こうして毎日を通させる、自然環境が整っている、周囲を見渡せば家族がいる、大切な人がいる、支えてくれる人がいる、同じ信仰をする仲間がいる、仕事もできる、そして何よりも今、生かされている——これらすべては、親神様のご守護で、感謝し、喜ぶことは、探せばいくらでもあるのです。

親神様のご守護、教祖の親心を思えば思うほど、感謝の心しか湧いてこない。——「報恩感謝の日々を通ること」が、「お道の信仰の基本的な態度」。——これを、教祖は「水を飲めば水の味がする」という言葉で教えられたと思えてなりません。

### ▽「ふしから芽が出る」

以前、前真柱様から聴かせていただいたことですが、教祖は、貧の道・どん底へ自ら進んで歩まれたので、ひながたの道中での一番のご苦勞は、経済的な困窮ではない。教祖のことを理解する人がいない、聴き分ける人がいなくなかで、そうした人々に教えを伝え

ること、これが一番のご苦勞でした。

月日のやしろと定まってからの教祖の言動は、世間の人々がそれまでに聞きしたこともないことばかりでしたから、人々はこれは理解できません。理解しないだけでなく、次第に「憑き物が付いた」「気がおかしくなった」と嘲り笑うようになりました。——教祖は、人に笑われ謗られる道を通られた。こうした人々に理解してもらい、教えを伝えることに、教祖は最も苦心された。つまり、「教祖のことを理解してくれる者が周囲にいなかった」ということです。

芦津大教会は大阪の中心地・西区で設立しましたが、父の代に、現在の東住吉区に移転しました。父は、終戦後ロシア軍の捕虜となってシベリアで11年間、抑留生活を送り、昭和31年(終戦11年後)、帰国。その翌年に撫養大教会の主佐家から井筒家へ養子に入りました。その次の年、シベリアから帰国してわずか1年4ヶ月で大教会長になりました。

会長になって、芦津のとてもでない事情を、実は二代真柱様が大きな親心で抱き抱えてくださっていたことを

知った父は、「このままでは申し訳ない」・「芦津は理が立たない」・「教祖のひながたを辿らせてもらおう」・「初代の道に立ち返ろう」と考え、教会の土地建物をすべて売却して、本部にお供えすることを決心、役員に相談すると賛同してくれ、二代真柱様に申し上げると「やってみよ」と道のをやが背中を押してくださった。そこで、すべてを本部にお返しして、大阪市内にある部内教会に大教会の神様をお鎮まりいただいた。

このときの世話人先生は「これから芦津は毎月集まった全ての御供を、おちばへ運ぶように。必要な経費があれば後で本部に貰いにくるように」という実に厳しいお仕込みでした。こうした中の再スタートでしたから、贅沢など一切できません。とにかく質素を旨とした教会生活が始まりました。教会の者が市場へ行き、落ちていた野菜を拾ったり、売れ残りの野菜をもらってくる、それを毎日の食事のおかずにしていました。

このふいしは芦津にとって実に大きなふいしでしたが、父や当時の芦津の人たちは、その中をどうして通ることができたのか。それは、教祖のひながたの道があったからです。「教祖は理解をしてくれるものが誰もいないなか、笑われ謗られる道をお通りくださった。それを思えばわしらはありがたい。道を歩けば挨拶をしてくれる人もいます。市場へ行ったら野菜を分けてくれる店もある。私たちの周りには理解してくれ支えてくれる人はなんぼでもある。教祖のことを思えば、結構やありがたい。まだまだ通れる。教祖はご存命や。一生懸命に通っていただければご存命の教祖が必ず導いてくださる、良いようにしてくださる、間違いない」と「ご存命の理」に凭れて通ったからあのふいしの中を安心して通り抜けることができたのです。

こうした大節の中を教祖のひながたを支えに、「ご存命の理」を頼りに通る中に、数々のご守護が上がってきました。人が寄り、心が寄り、物が寄り、真実が寄って、5年後には、現在の場所に、小さな神殿でしたが、教会復興のご守護をいただきました。

今の芦津があるのは、あの大きなふいしがあればこそです。——あの苦勞の中をいつも教祖が支えてくださり、教祖が「ご存命の理」でお導きくださったおかげで、あのふいしを乗り越えるこ

とができ、「ふいしから芽が出る」ご守護をいただいたのです。

現在、皆さんの中には「私は苦勞の道を通っている」・「大変な道を通っている」と思っている方がいらつしやうたとしても、それを理解してくれる人は必ずありますね。皆さんの周りを見てください。教会に繋がるよふぼくや信者さんがおられるではないですか。理の親はいつも温かい心で見守ってくれるし、大教会へ参れば心を打ち解けあえる教友もいる。おちばへ帰れば親心で迎えてくださる。私たちの周りには、理解をして支えてくれる人はいくらでもあります。

少々の苦勞があっても、教祖を思えば、まだまだありがたい、まだまだ結構なのです。さらに、教祖がご存命で導いてくださっていることが、実にありがたく心強い限りです。

私は「どうか、教祖のお供をさせていただきますとうございます」とお願い申して本部巡教に向かっています。つまり、今、私のそばに教祖が居られるので、安心して今日の御用を勤めることができますのです。皆さんの側にも教祖は居られるから安心してお道の御用を

勤めることができるのです。

教祖は、「ご存命の理」をもってお働きくださっています。これほどありがたく心強いことはありません。

皆さん方は、よふぼくの先達として、たすけ一条の道を歩んでおられる。その道中は、決して楽しいことばかりではありません。教祖は「この者に成人させてやろう」と思われたら、親心のうえから、度々とふしをお見せくださいます。

現に、今、辛くて苦しい道を歩んでおられる方もあるでしょう。人に言うに言えん、泣くに泣けんような道を通っておられる方もいるでしょう。心が折れそうになるときもあります。ペしゃんこに潰れてしまいうえになるときもあると思う。そんなときこそ、教祖のひながたを思い浮かべていただきたい。そして、教祖を思えば「まだまだだ、わしらはありがたい・まだまだ結構や」と心を奮い起こして通っていただきたいのです。

そして、存命の教祖に、どこまでもお縋りして、お通りいただきたい。教祖さえ見失わなければ、どんなふしも芽が吹く道へとお導きくださるに違いありません。教祖のひながたの道

信仰の支えとして、どこまでもご存命

の教祖のお供をさせていただいて、どうか、たすけ一条の道を進んでいただきたいと思えます。

▽「人救けたら我が身救かる」

教祖がひながたの道中で心を尽くされたのは、世界一れつをたすけること、そのための人材を引き寄せて育てることです。

つまり、教祖がなさったのは、「人をたすける」ことと「人を育てる」こと、今で言えば、「おたすけ」と「丹精」です。ですから、教会活動のすべては、「人をたすける」こと、「人を育てる」こと、すなわち「おたすけ」と「丹精」に繋がっているわけです。

一人の人をよふぼくに「丹精」するためには、その道中、おたすけが欠かせません。このたすけが教会長・よふぼくの大切な御用です。

親神様は、陽気ぐらしを目標に人間界を作られた。陽気ぐらしというのは、簡単に言えば、「親神様をやと慕う私たち人間が、お互い、一れつ兄弟姉妹として、支え合い、補い合い、励まし合い、たすけ合う世界」ですから、親神様が、私たち人間に望まれて

いることは、一れつ兄弟姉妹としての

「たすけ合い」であります。

「おたすけ」と聞けば、何か相手を一方的にたすけるような感じがしますが、決してそうではありません。人間の親子を例にとつて考えてみると、例

えば、困難に遭遇して悩み苦しんでいる弟や妹に、その支えになってやろうと手を差し伸べる兄や姉の姿。その逆に、悩み苦しんでいる兄や姉に、元氣になつてほしいと年下ながらも心を尽くしている弟や妹の姿。これは形のう

えでは、一方が手を差し伸べていることになりませんが、親から見れば、子供同士がたすけ合っている姿です。親にとつてこんなにうれしいことはありませんから、おたすけは、親神様が望まれる一れつ兄弟姉妹の「たすけ合い」に他ならないのです。

お道のお互いは、悩み苦しむ人に対して、その人を「本当の兄弟姉妹」と思つて親身になつておたすけをさせていただきたいものです。

このおたすけで、まず第一に肝心なことは、言うまでもなく「人をたすける心」です。人をたすける誠の心を尽くすことです。

『教祖伝逸話篇』「四二 人を救けたら」に、次のような話があります。

福井県に住むある男性が、娘の気の間違い(精神病)を救けてもらいたいと、教祖にお願いすると、教祖は、「村にかえつたら、各家を訪ねて、四十二人の人を救けるのやで。なむてんりわうのみこと、と唱えて、手を合わせて神さんをしっかり拝んで廻わるのやで。人救けたら我が身が救かるのや。」との言葉があった。その男性は、藁にも縋る思いで、この教祖のお言葉を素直に実行、村中をいかに廻わり、病人の居る家には何度も足を運んで、四十二人の平癒を拝み続けたところ、不思議にも、娘の気の病は全快のご守護を頂いて、養子をもらう喜びまでお与えいただいた、という話です。

この逸話を読んで、拝んだ42人の人は果たしてたすかつたのか、ご守護いただいたのかと考へたことがあります。この逸話では、そのことは問題ではありません。ご守護くださるのは親神様であつて、ご守護いただくかどうかは、親神様の範疇です。

つまり、この逸話で最も大切な部分は、この男性が42人の身上平癒を拝み続けたということ。「この病人さんを



「なんとかおたすけ下さいませ」と真剣に願った。——この逸話は、私たちがよく聞く「人をたすける誠の心の大切さ」を、教えているのです。

おたすけにあたっては、このように人をたすける誠の心をもって掛かることが大事ですが、ただ願うだけでなく、そのうえで、なおも大切なことは、その人にたすかっていたただくために、親神様にお受け取りいただけただけの真実をいかに尽くすかということです。

以前、教祖殿当番を勤めていたときのこと、教服を着てお守所から出たところに、見ず知らずの青年から声が掛けられた。「先生、教祖のお下がりをいただけませんか」と尋ねられた。「どうしたの?」と訊くと「実は、昨夜、友達が突然の病気で倒れて病院に運び込まれました。すぐに駆けつけておさづけを取り次いだんですが、友人の苦しそうな顔を見たら、居ても立ってもおれなくなつて、おちばへお願いに帰ってきました。その彼にお下がりをお届けして、またおたすけに行きたい」とのこと。「それじゃ、お御供さんをお願いできないか。お御供さんは、これも

ご存命の教祖にお供えをしたご洗米のお下がりがだから、ここには教祖の存命の理が籠っている。お守所で理立てをしたら頂戴できるから、それを持って友人のおたすけに行つて」と伝えた。本人は、早速、お御供をいただいて、教祖殿でご存命の働きを真剣に願って、友人のもとにおたすけに舞い戻りました。この青年は教会長でも後継者でもありません、サラリーマンの一ふぼぐです。それも「福岡から帰ってきた」と言っていました。その彼は、

「身上になつた友人をたすけていたできた」と、大切な一日を友人のためにお供えをした。福岡から新幹線で帰れば往復3万円は掛かるでしょう。それを身銭を切つて、友人のためにこれを尽くした。友人のご守護を願って、自らが真実を尽くしたので。実に素晴らしい一ふぼぐの姿ではないですか。

年祭活動は「たすけの旬」であり、それはまた「たすかる旬」でもありません。しかし、必ず奇跡的なご守護をいただけるとも限りません。

ある布教師の話。——癌の進行が進んで治る見込みがなく家族も覚悟を決

めていた方のおたすけに掛かった。「必ずたすかります」と、毎日通った。「なんとかたすかっていたきたい」と、連日十二下りのお願いとめをし、身上平癒におちばまで歩いて足を運び、水垢離もし、断食もしておたすけに通ったけれども、結局は出直してしまつた。そのとき、その布教師は、家族に対して「私の真実が足りませんでした」と泣いて詫言した。家族は「私たちがですら諦めていたのに、この人は、毎日一生懸命にお願いをしてくれ、死んだら自分のせいだと泣いてお詫言までしてくれる」と、この布教師の真実が、家族の心を揺り動かして、信仰の道に入ってくれた。

身上たすけにおいて、結果として、奇跡的なご守護をいただけませんでした。だが、この布教師の尽くした真実を、親神様がお受け取りくださつて、その家族が「真にたすかる道」へと導かれたのです。

こうしたご守護の姿もあるのです。不思議なたすけが上がるかどうかは、飽くまでも親神様の範疇、親神様にお任せするより他ありません。

私たちがふぼぐにできることは、「この人になんとかたすかっていたきた

い」と、ひたすらに真剣に存命の教祖に縋りお願いを申し上げる、人をたすける誠の心を尽くすことです。

そして、「この人のために、私は、何ができるか」と思案し、親神様にお受け取りいただけるだけの真実を尽くすことです。この誠真実によって、手がたすかり、「人救けたら我が身救かる」というご守護がいただけるのです。本当におたすけはありがたいですね。

私の卑近な体験から、「諭達」に記された教祖の3つの教えを思案しました。

教祖のひながたの道は、私たちが陽気ぐらしの道を通るためのお手本です。私たちがこの道を歩む中に、思案にされることや何かの岐路に立つことがありますが、そうしたときには「教祖ならどうなさるだろうか」「教祖ならいかようにお考えなさるだろうか」と、この思案に立つて、行動に移すことが大切だと思います。決して教祖を見失わないことです。

たすけの手を差し伸べてくださつて、いる教祖に、私たちが方から一歩でも二歩でも近づいて、この旬に、あらた



めて教祖のひながたを目標に、教えを素直に実践したい。

▼「諭達」に示された旬の歩み方

さて、私たちの身の回りや世界に目を移したときに、「諭達」に、

今日、世の中には、他者への思いやりを欠いた自己主張や、刹那的行動があふれ、人々は、己が力を過信し、我が身思案に流れ、心の闇路をさまよっている。

と示される姿が目に見えます。争いや混乱が絶えることなく陽気ぐらしには程遠い現状と言わざるを得ません。

では、今のこの世の中に対して、私たちお道の者は何ができるのでしようか。

もちろん、今の状況をひっくり返すような大きなことはできませんが、私たちにできることは、一人ひとりが教祖から教えていただいた陽気ぐらしの教えを実践して、その姿を身近なところから周囲に映していくことだと思います。コツコツとした歩みですが、これを積み重ねていくしかありません。

そこで、では、この旬に私たちよぶくとしてどのようなように歩んだらいい

のかについて、「諭達」に、

よぶくは、進んで教会に足を運び、日頃からひのきしんに励み、家庭や職場など身近なところから、にをいがけを心掛けよう。身上、事情で悩む人々には、親身に寄り添い、おつとめで治まりを願い、病む者にはおさづけを取り次ぎ、真にたすかる道があることを伝えよう。親神様は真実の心を受け取って、自由の御守護をお見せ下される。

と示されています。

ここに記されているよぶくの歩み(今の旬の歩み)ですが、これは、よぶくとしての基本的な信仰実践、よぶくとしてして当然のこととも言えますが、しかしながら、これができないという現実もあると思います。これをよぶく、皆が実践すれば、陽気ぐらしへの道は一段と進むに違いないと思います。

そこで、皆様方にお願ひしたいのは、ここに集う皆さん方は、教会長やその配偶者、布教所長など、教会の主立つ方々です。つまり、人を導き育てる立場である皆さん方が、まずこれを率先して実行することを心がけて、陽気ぐ

らしへの歩みを進めていただきたいのです。

「陽気ぐらし」を人に説く者が、陽気ぐらしを忘れてしまつては話になりません。短気な人に「腹を立てるな」と言われても聞けぬ相談です。高慢な人に「心を低くして通れ」と言われても飲めぬ話です。何の説得力も持ちません。

▽身近なところから「丹精」

まずは、私を含めて、ここに集う立場のお互いが、「諭達」に示された旬の歩みを、一つひとつ実践して、身近なところから陽気ぐらしを世の中に映していくことが肝心です。

そして、自ら実践しつつ、所属のよぶくや理の子にも動いてもらい、成人してもらわねばなりません。これは一にかかつて、教会長の「丹精」、理の親の「丹精」にあると思います。

しかし「なんとか聴き分けてもらおう」・「成人していただく」と思つても、相手がそれを受け入れてくれなければどうにもなりません。

けれども、教会長が理の子から信頼されていけば、慕われていけば、たとえ、厳しい仕込みであっても受け入れ

てくれるのです。そのためには、普段から、「足を運び」・「心を通わせ」・「世話をすること」です。

つまり、「丹精」の基本は、「足を運び」・「心を通わせ」・「世話をすること」の3つだと思います。

そして、よぶくや理の子に何かあったら、飛んで行つていただきたい。かなりの日数が経つてから行つたのでは、お見舞いにしかなりません。すぐに行けばおたすけになります。おたすけとお見舞いとは受ける側の気持ちとは全然違います。

「あの辛いときに、苦しいときに、会長さんはすぐ来てくださった」ということが、理の子にとって忘れることのできない心の宝になるのです。困ったときに頼りになるのが教会長です。おたすけが一番の「丹精」になるということを心においていただきたいと思ひます。

よぶくは、いんねんあつて、親神様が教会に繋げてくださいました。普段からよぶく・信者に心を繋ぎ、足を運ぶ、遠方であるからといって放つておらずに、折を見て、年に数度は足を運んでいただきたいと思ひます。よぶくにとって、教会から流され

る句の声はたすけの綱、教会長の取り次ぐおさづけは命の綱とも言えるのである。

所属するよふぼく・信者が、時句の歩みを勇んで進めて、ともに成人に近づめ励むことができるように、どうか、皆さん、本気になって、しっかりと「丹精」に励んでくださることをお願いしたいのです。

### ▽道は末代：縦の伝道

またよふぼくや理の子の「丹精」と同様に、忘れてはならないのが、次の世代を「育てる」ことです。「諭達」にも、この旨が述べられています。これは、大切なご用です。

「道は末代」と教えられるように、この道は、陽気ぐらし世界の実現を目指して、末代、続いて行かねばなりません。「道」は歩いてこそその道であって、歩く者がいなければならぬ。「道」は道でなくなりません。

そこで、皆さん、「末代」と聞けば、何か、遙か先のことに目が行きがちですが、私たちは、わずか100年先や200年先のことで、誰にも分かりません。何も見えません。しかし、はっきりと見えているものがある。それは、次の

世代です。

「道」が末代であるためには、次の世代を「育てる」こと。これを、常に意識して、コツコツと、しかも積極的に取り組むことです。

この「信仰の継承」について、以前、前真柱様が、駅伝のバトンに例えて話されたことがあります。駅伝を信仰に置き換えれば、スタートは入信の元一日、ゴールは陽気ぐらしの世界、ここを目指して、私たちは、代々と、信仰のバトンを渡していくのです。その道程も長い距離や短い距離、平坦な道もあれば上り坂・下り坂もあります。それに相応しい区間を、親神様は、私たち一人ひとりに、与えて下さっている。

私たちは、親神様から託されている。現在、平坦な道を快走するように順調に道を進んでいる教会もあれば、苦心や苦勞をしながら上り坂を息を切らして走っているところもあるでしょう。中には、もう歩くだけでも辛いような、ガタゴト道や砂利道に遭遇している方もあるかもしれない。でも「今のこの道を通れるのは、お前しかいない、頼んだぞ」と、親神様が託してくださっている道中だと思えば、何か、心に力と勇気が湧いてくるのではないで

すか。

私たち一人ひとりに親神様からお掛けくださるご期待と親心にお応えしながら、次にバトンを渡すのが、私たちの役目です。「そのとき」になって、一生懸命にやっている「私の信仰」を継いでくれる者がいなければ、寂しい限りです。

先人が、懸命に通ってきた信仰のバトンを受けて、私たち一人ひとりが、今、この道を歩んでいます。その、私たちの命には限りがあります。つまり、誰もが、信仰のバトンを渡すときが必ず来ます。「そのとき」に、「後は頼んだぞ」と、次の者に、安心して、バトンを渡してやりたいではないですか。そのためにも、私たちの、まず、この次の世代をしっかりと「育成」することです。これからの道の将来を担っていく次の世代の「育成」に、この句に、あらためて、力を入れることです。

信仰の喜びを親から子へ、子から孫へと繋いでいく「縦の伝道」は、今の旬の、最も大切な御用の一つとお考えください。どうか、そのための骨折りを決して惜しまず、大いに工夫をし、苦心をして、お取り組みいただきたいと思えます。

▼教祖にお喜びいただくために  
「一手一つの和」  
さて、「諭達」の最後に、

この道にお引き寄せ頂く道の子一同が、教祖の年祭を成人の節目として、世界たすけの歩みを一手一つに力強く押し進め、御存命で働き下さる教祖にご安心頂き、お喜び頂きたい。

と述べられていますが、この「御存命でお働き下さる教祖にご安心頂き」たい、「お喜び頂きたい」とのお言葉に、真柱様の思いが集約されているように、私は感じています。

これにお応えするために、欠いてはならないのは、「一手一つ」です。「一手一つ」とは、まず、芯になる者が、親神様のお心に添った神一条の心をしっかりと定めることです。芯の心が定まらないところに、「一手一つの和」はできません。そして、関わる人々が、芯になる者の心を汲んで、心結び合、それぞれの徳分・個性を活かして、持ち場・立場の役割を力を合わせて務めきるということです。

「一手一つ」に結ばば、どれだけお働きいただけるかは、おさしげで、

一手一つ理が治まれば日々理が栄える。  
(明治22・1・27)

一手一つの速やか理をあれば、速やかと治まる。  
(明治22・5・19)

一手一つに皆結んでくれるなら、どんな守護もする。  
(明治31・1・19)

と、「一手一つ」に結んで事に当たれば、「日々理が栄える」・「治まらんところを、速やか治めてやる」・「どんな守護でもしてやる」と、はっきりと教えられています。

このたびの「諭達」を受けて、笠岡大教会では大教会長さんは「心を定めて進む」べく、そうした心定めをして、年祭活動の方針と具体的な目標を定められますが、どうか、この大教会長さんを芯に、これに「一手一つ」に取り組んでいただきたいと思えます。

また、この大教会の方針に添って、各教会において年祭活動に掛かられますが、会長さん方一人ひとりが、教会の先頭に立って、年祭活動を勤める心をしかと定めて、所属するよぶ、信者の皆さんと「一手一つ」に心を結んで、時旬の歩みを、心勇んで進んでいただきたい。

そして年祭活動に取り組む全教よぶ、の芯として発布されたのが「諭達

第四号」ですが、「諭達」に込められた真柱様のお心をしっかりと汲み取り、「諭達」の精神に則って、道のを

や・真柱様を芯に、教会長・よぶ、が「一手一つ」に心を結んで、年祭活動に勇んで掛かる。――そうすれば、

「日々理が栄える」・「速やか治まる」・「どんな守護でもする」という誠にありがたくうれしい姿を、この旬に、随所にお見せいただけるに違いありません。

いよいよ、年祭活動が始動いたします。教祖年祭の旬は「たすけの旬」・「成人の旬」であるならば、「たすかる旬」・「成人できる旬」でもあります。教祖

の年祭で、皆、たすけていただき、成人させてもらいます。皆、結構にしていたのであります。私たちは今、途轍もなくうれしい旬を迎えているのです。

親神様のご守護には一点の曇もなく、教祖の親心には一部の隙間もありません。このご守護を信じきり、親心に凭れきっておたすけに励めば、随所で、うれしい姿、うれしい理を見せていただけるのです。教祖さえ見失わなければ、どんな中でも教祖が支えてくださる、「存命の理」で、間違いなく

導いてくださるのです。どうか、ご存命でお働きくださる教祖にご安心いただき、お喜びいただけるように、「諭達」の精神に、全教が「一手一つ」に心を結んで、教祖140年祭を目指して、心明るく、心勇んで、成人の道を進ませていただこうではありませんか。

どうか、皆様方の、この、素晴らしい旬のたすけ一条、弥増しに勇んだご丹精を、最後にお願ひいたします。

《以上、要約》

▼大教会長様 閉講挨拶

皆さま、それぞれに、今のお話をしっかりと咀嚼し、胸に納められたことと思えます。

いよいよ始まる教祖140年祭への年祭活動、まず、この本部巡教を受けて、大教会から3年間の方針・目標を年内中に発表します。その後、それぞれの教会でも、目標・実践項目を定めて実践していただきます。

現時点では、方針・目標について具体的なことは申せませんが、「今、自分に何ができるのかを考え、この三年千日、とにかく勇んで動き続けること」、「この、私の胸にある気持ちを、

この場ではお伝えし、皆さま、一人ひとりに、私と同じような気持ちになつていただくようお願いいたします。





笠岡の道編纂委員会  
史跡探訪 実施  
史料部

有為転変という言葉が心に響く。年々歳々花相似たり 歳々年々人同じからず

今回12月5・6日、第2回目の大教会史史跡見学に三重県伊賀市と大阪市を歴訪した。伊賀市は笠岡初代様の生地で、私は何度か訪れたことがあるが、もう随分昔の事で、どこに生家があるのか、記憶も定かでなかった。昔



初代様の生家(三重県伊賀市)

の写真を頼りにスマホで探して何とかそれらしい家の前に立った。フト思い出す、この家を何度か訪れて、その時の戸主・川合ふみさんと2・3時間も話したのだろうか、家を出て別れ際、「もう来ないで下さい」と言われた。あれから20年近く経ったのだろうか。隣家のお年寄りがちようど家から出て来られた。「あの家、川合さんですね?」「そうですね。でももう何年も前にお婆さん亡くなられて、娘さんが一人暮らししておられます」お婆さんはふみさんの事かもしれない、そう思いながら、川合さんの家のガラス戸を叩いた。反応がない。鍵はかかってなかったたので、開けて声をかけた。返事がない。入って土間の奥まで進んで、「ごめん下さい」と2・3度声をかけると、奥から「はい」と返事があった。出て来られる前に周囲をみる。片付いてない。前来た時はこの土間に台が並んで小間物(上野の特産品組紐の細工物などが並んでいた。「何でしょうか。」出て来られたのはふみさんの娘さんなのか、髪がざんばらでなんとなくとつきにくい。「ふみさんは?」「5年程前に亡くなりました」何しに来たとばかりの態度に、笠岡の親戚ですとも言えず、曾

祖母の生まれた家なので、尋ねてきたと簡単にはなした。いろいろともっと聴きたかったのだが、そうそうに家を出た。何か、尋ねてきたのが、悪かったような気がして、落ち込んでしまった。皆で往年の川合家をバックに記念撮影をして、川合



川合家の菩提寺・念仏寺(同市)

の菩提寺・念仏寺に向かった。立派なお寺である。20年近く前に来た時は、この寺町の道は狭く、あまり訪れる人もなかった。墓地で、あとき川合家の墓石を探して、見つけたのかどうか、記憶が定かでない。皆で手分けして探したが、見つからない、お寺の居宅で声をかけると女の方が出て来られて、案内して下さった。リウさん(初代様の4女。川合家を継いだ方。ふみさんの母)の墓が何故か真新しい。参る人もないのか、生家を見てきたばかりで、それも当然か、などと、広い墓所を歩き疲れてボンヤリしてしまった。お水だけでもと思って、水くみ場で小さい桶に水を汲んで戻って花生けなどに水をさして念仏寺を後にした。続いて木



淀川遡航終点の碑(同市)





大阪・清水寺(大阪市天王寺区)

津川遡航終点の地の石碑を見学、初代様は20歳で川合の生家を後にしてここから高瀬舟に乗って大阪に出られたのか、と思いを回らせた。私達は、車で163号線を木津川を左の車窓に見ながら24号線の交差点まで下り、奈良市経由で天理まで、5日の日程を終えた。

翌日、大阪・天王寺の有栖山清光院清水寺を訪れた。昨日と打って変わって晴れ渡った中、上町台地の南端に位置する清水寺からの大阪俯瞰図を、も

し林立するビルがなければ、と当時、明治初年頃を偲びながら眺めさせて頂いた。20歳の初代様は朝4寺起きで大阪久宝寺町の折井の店から、時は11月、およそ1里の道を1週間の裸足参りをされた。松屋町筋には所々霜が降り、松屋町から寺町に入る角の「あやめ」だけが起きていた、と初代様の聞き書きにはある。満願の日、不思議な縁で初代様の身元引受人の上原佐吉様とばったりと会う。初代様は知らぬ振り

でそばをすりぬけて清水寺に急ぐのであるが、その日の午後、備佐の佐吉様から呼び出しがあった。これがきっかけで此の年明治4年暮れ、初代様は折井を引き払い、豊表問屋・備佐の上原佐吉様の娘分として住み込む事となる。次いで月江寺の近くにあったという西照庵跡を探し探して歩く。この料亭・西照庵の近くに



清水寺の舞台



初代様が裸足参りの際通られた松屋町筋

上原佐助・さと様の住まいがあった。備佐本店は長堀、西店は新町、上原佐吉様の隠居所は心齋橋筋と三ツ寺筋との角地、初代様は毎日の如く、西照庵近くの住まいから道頓堀を通って佐吉様の許へ通うのが日課だった。

続いて久宝寺町あたりを見て長堀まで下り、左折して玉造に向かう。環状線・玉造駅の近くに玉造二軒茶屋の碑がある。明治18年、備佐の家産を整理して上原佐吉様夫婦、光様、笠原いし様は笠岡へ移住、上原佐助様さと様子供様は、この二軒茶屋の近く、東雲町に居を移し仮住まいとされた。ここは大阪の東の出入り口で暗峠越えで奈良に向かう処、当時の旅人はこの二軒茶屋で別れを惜しみ、また久しぶりの出会いを喜びあった。初代様はこの玉造東雲町に明治18年から19年半ほど住まいしておられた。今回の史跡訪問はこの地で終わりとした。



当時の大阪の旅の玄関口、玉造二軒茶屋跡の碑 (大阪市東成区)

# 笠岡大教会 年間行事 予定表

部会 月	婦人会	青年会	少年会	学生会 学生担当委員会
1	28 婦人会創立の日	<ul style="list-style-type: none"> <li>青年会笠岡分会総会</li> <li>父親講座</li> <li>布教キャラバン隊 (いずれも、開催月日未定)</li> </ul>	21 てっちゃんシアター 27 年頭幹部会	
2	3 直轄委員長・委員研修会			5~7 天理高校1部受験世話取り 19 冬の運動会 21 学生層育成者講習会
3			30~4/1 笠岡むつみ鼓笛 合同練習会	4~8 学生生徒修養会大学の部 10~12 学生生徒修養会高校卒業生コース 27・28 春の学生おちばがえり
4	19 本部 婦人会総会		1 笠岡団 おつとめまなび総会	30 親里管内学校 新入生歓迎会
5			21 縦の伝道講習会 てっちゃんシアター	
6	3~4 こかん様に続く会	おやさとふしん 青年会ひのきしん隊入隊	24 わかぎの集い	
7			21 てっちゃんシアター	
8			21 てっちゃんシアター 21~23 サマーキャンプ	・ 学生生徒修養会高校の部 (日程は未定)
9	23 委員部長後継者講習会			
10		27 天理教青年会総会	21 てっちゃんシアター	1 笠岡 学生会の日
11				
12				
備考	<ul style="list-style-type: none"> <li>毎月2日 ひまわり会 例会 1月・8月はなし</li> <li>毎月3日 婦人会 例会 1月はなし</li> <li>毎月20日 女子青年 伏せ込みひのきしん</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>◎有志ひのきしん隊 (随時)</li> <li>◎ZOOM勉強会 (随時)</li> </ul>		◎親睦行事 (随時)

# 立教 1 8 6 年(令和 5 年/2023年)

部会 月	全体行事 その他	ひのきしん	布 教 部	海 外 部
1	5~18 直轄教会春季大祭参拝 (部内一斉巡教) 20 年頭会議	5~15 本部食堂(福山ブロック)  春季大祭詰所受入	20 教会長夫妻 並びに 布教所長講習会 (年頭会議に引き続き)	
2	3~15 部内一斉巡教			
3	3~15 部内一斉巡教 27・28 修養科修了講習会		21 行列の出来る勉強会 於：大教会	広島平和公園にをいがけ (外国語パンフレット配布)
4	27 雅楽講習会	教祖ご誕生祭詰所受入	29 全教一斉ひのきしんデー	9 アフリカ支援バザー
5	5~18 直轄教会定期巡教	1~15 本部食堂(西ブロック)		
6	27・28 修養科修了講習会	草刈り、剪定		
7				
8		こどもおぢばがえり詰所受入	21 布教推進講習会	8 英語講習会
9	27・28 修養科修了講習会		1~30 布教推進強調月間 23 笠岡にをいがけ推進日 28~30 全教一斉にをいがけデー	
10	5~18 直轄教会秋季大祭参拝 22 大教会長杯親睦スポーツ大会 28 雅楽講習会	3 草刈り、剪定 神殿障子張替  秋季大祭詰所受入	<b>祭典講話(案)</b> 1月 大 教 会 長 様 2月 ㊦学生層育成者講習会 3月 上 原 志 郎 4月 田 林 久 嗣 5月 ㊨縦の伝道講習会 6月 佐 藤 道 孝 7月 虫 明 立 生 8月 ㊧布教推進講習会 9月 田 中 隆 之 10月 大 教 会 長 様 11月 ㊩海外伝道講習会 12月 門 脇 元 教	
11				21 広島平和公園にをいがけ (外国語パンフレット配布) 海外伝道講習会
12	20 心定め提出 27・28 修養科修了講習会	22 年末大掃除 27 詰所餅搗		
備 考	◎役員部長会 毎月20日 午後 0:30 ◎直轄教会長連絡会 毎月20日 午後 2:00 ●雅楽会練習 毎月21日 午前 8 時~	註：ブロックの区分けは 東：岡山県以东の直轄教会 とその部内教会 西：広島県以西の直轄教会 とその部内教会 上府：上下、府中市		◎英語クラブ (毎月22日19時~20時半)



**第30回女子青年大会**  
**笠岡より57人参加**  
**女子青年**

去る11月27日、清々しい秋晴れの元、本部中庭で第30回女子青年大会が開催されました。

笠岡女子青年としては57人(うち別席者4人)の御守護を頂きました。

式典では真柱様よりメッセージ、婦人会長様よりご挨拶を頂戴いたしました。



支部の集い 集合写真

ご挨拶の中に、論達第4号が發布された事を踏まえ年祭をつとめる意義についてお話しくだされ、今の自分にとってひながたをたどるというのはどういふ事なのかを考えて実行に移すようお促し下さいました。

午後からは詰所で支部の集いを行いました。支部長さまのお話、大会の振り返りとして女子青年同士でグループワークをしました。

同じ世代だからこそ分かる気持ち、疑問、悩みなど短時間ではありましたが共有する事ができ、充実した時間になりました。



担当の奥様方の手作り晩御飯！

が共有する事ができ、充実した時間になりました。

今回、昨今のコロナ禍で無事に大会へ参加できるのだろうか、と不安に思っていました。が、沢山の女子青年と共にあれば帰らせていただく事ができました。

これも皆様のお力添え、お声掛けの賜物だと実感しております。

この紙面上をお借りして御礼申し上げます。ありがとうございます。

(委員長 山野 奈々)



支部の集いにてグループワーク



笠岡女子青年ポーズ「笠岡は桃じゃけえ！」



みんなでひのきしん



# 十一月月次祭祭文

これの笠岡大教会の神床にお鎮まり下さいませ  
親神天理王命の御前に 会長上原明勇 慎んで申し上げます

親神様には 人間が陽気ぐらしをするのを見て共に楽しみたいとの思召から  
ない人間ない世界をお創め下されたばかりではなく 日夜変わる事なく  
ご守護下さり その時々に応じた仕込みをもってお導き下さいます親心の程  
は誠に有難く勿体ない極みでございます 私共は お望み下さる陽気ぐらし  
世界の実現を目指して一歩でも前進するべく 日々勇んでたすけ一条の上に  
努め励ませていただいております

その中にも今日の吉日は 月に一度の御祭日でございますので ただ今から  
おつとめ奉仕人一同 喜び心たすけ心も一人に 明るく陽気に勇んで坐りづと  
めてきどりをつとめて 十一月の月次祭を執り行わせていただきます 御前  
には 少しずつ厳しさを増す寒さをも厭わず今日の日を樂しみに寄り集いま  
した道の子供たちが 相共にお歌を唱和し日頃のご高思に改めて御礼申し上  
げ 尚も変わらぬ親心にお縋りする皆の真実の状をご覧下さいまして 親神様  
にもお勇み下さいますようお願い申し上げます

さて先月の秋の大祭に於いて 論達第四号のご発布を頂きました この年  
祭に向かう時句に真柱様から直接お言葉をお聞かせ頂き 身も心も引き締ま  
る思いであります

また本日は祭典終了後 本部より井筒梅夫先生にお越し頂き 居ずまいを整  
えて 大教会役員並びにおつとめ奉仕人 教会長夫妻 布教所長で本部巡教を  
受けさせて頂きます 教祖百四十年祭に向けての親の声をしっかりと胸に始  
めて 来年から始まる三年千日と仕切つての年祭活動を 親神様教祖にお喜び  
頂けるよう笠岡一丸となつて実働させて頂く所存でございます

何卒親神様には 旬々にお聞かせ頂く親の声を頼りに成人の歩みを進める  
皆の誠真実の心をお受取り下さいまして 一人ひとりのたすけ心が次々と伸  
び拡がり お望み下さる陽気ぐらしの世の状が一日も早く実現しますようお  
導きの程を 一同と共に慎んでお願い申し上げます

## 立教百八十五年 十一月月次祭 祭典役割表

祭主	大教会長様
扨者	上原 浩 山野 弘実

賛者	内海 史郎 杉原 善朗
指図方	田中 隆之

講話 (なし)

一月講話 大教会長様

役割	区分		地 方	おつとめ てをどり	笛	ちゃんぽん	拍子木	太鼓	すりがね	小鼓	琴	三味線	胡弓
	前 半	後 半											
坐り勤	上原 志郎	岡崎 真一	上原 浩	大教会長様	武内 清明	佐藤 道孝	中村 剛	谷内 伸自	吉岡 壽	中村 義太郎	佐藤 香苗	上原 順子	武内 正美
	横山 逸郎	田中 隆之	渡邊 隆夫	大教会長様	今川 昌彦	赤木 素志	山田 敏教	岡田 誠	三代 温生	杉原 善朗	内海 安子	三島 照美	菅尾 一美
前 半	門脇 元教	中島 誠治	森本 忠善	前会長様	吉岡 八恵	横山 小智	門脇 加津	大教会奥様	前奥様	田中 ますみ	吉岡 昌彦	今川 昌彦	赤木 素志
	吉岡 誠一郎	中村 道徳	上原 繁道	前会長様	横山 小智	門脇 加津	大教会奥様	前奥様	前奥様	田中 ますみ	吉岡 昌彦	今川 昌彦	赤木 素志
後 半	高木 昭祥	田中 隆之	高木 昭祥	大教会奥様	横山 小智	門脇 加津	大教会奥様	前奥様	前奥様	田中 ますみ	吉岡 昌彦	今川 昌彦	赤木 素志
	高木 昭祥	田中 隆之	高木 昭祥	大教会奥様	横山 小智	門脇 加津	大教会奥様	前奥様	前奥様	田中 ますみ	吉岡 昌彦	今川 昌彦	赤木 素志

# 大教会だより

◎年祭準備委員会 発足

立教185年11月21日付

委員

杉原善朗	上原愛美	佐藤真孝	森本忠善	山上野弘	武内正美	田中隆之	門脇元教
------	------	------	------	------	------	------	------

◎任命願

島中 分教会

\*前任 内海 安子  
\*新任 内海 史郎



内海史郎氏

◎任命願

惠陽 分教会

\*前任 藤本 基喜  
\*新任 藤本 惠子



藤本恵子姉

☆奉告祭

立教186年2月12日  
立教185年11月26日承認

☆奉告祭

立教185年12月11日  
立教185年11月26日承認



去る10月25日、おちばにて、天理教  
校学園高校雅楽部「秋雅楽祭(むす  
び)」を鑑賞した。

来年3月に閉校する為、この最後の  
演奏会に向けて取り組んできた。「天  
理教付属高校から始まり、天理教校親  
里高校、そして、天理教校学園高校親

楽部と、48年先輩方から繋いできまし  
た。感謝の思いを届けられる演奏会に  
したい」との事だった。

私は、年々、部員が減っているの  
で、さびしい思いの方が先走っていたが、  
演奏が始まると、心地良い緊張感の中、  
堂々とした楽服姿の学生が現れ、(わ  
あー、すごい！素晴らしい、一手一  
つ！心が合わさって、美しい音色、  
演奏、可憐な舞だ。壮大だ！)と、感  
動の連続だった。

管弦は、千年余りに渡って伝えられ  
た世界最古のオーケストラらしい。と  
ても、新鮮だった。舞楽の衣装も、手  
作りだったようだ。開催されるかとい  
う不安も、喜びに替え、前向きに学ぶ  
学生たちに感謝した。――21名の学生  
の純粋でひたむきな演奏と爽やかな笑  
顔に大拍手。天理教校学園高校の伝統  
とこれまでの歴史も大切にしたい！  
輝き続けられるように！  
(む)

## 詰所からのお願い

### 詰所での宿泊・喫食について

- ・詰所で宿泊・喫食される場合は、「教会名・代表者名・泊数・食数」を、  
2日前までには、必ず詰所へご連絡ください。
- ・食事をしない(宿泊のみの)場合でも、2日前には申し込みをして  
下さるようお願い致します。

部内教会・信者に徹底願います。